

全日本吹奏楽コンクールの審査における教育的視点の介入 —音楽誌『Band Journal』中学校の部の講評から—

石野美久

はじめに

本研究は、全日本吹奏楽コンクール（以下コンクール）の審査の評価基準に、どのような視点が内在しているかを明らかにすることが目的である。今日、日本の吹奏楽部は中学校の文化部活動の中でも最大規模を誇る。文化庁によれば、文化部活動に所属する中学生の47.2%が吹奏楽部に所属している（文化庁、2018, p.9）。運動部活動に比べ活動中の事故や怪我の件数は少ないが、文化庁による「文化部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」では、文化部活動が本来の活動に加え地域の行事や催し等に参加したり、運動部活動の応援として試合に同行したりすることにより、活動が長期間に及んだり休養日が取りづらくなったりしていることが課題とされている（p.3）。また、同ガイドラインでは、文化部活動も運動部活動と同様に、長期間の活動は精神的・体力的な負担を伴うことも指摘されている（p.3）。関（2017）は、「吹奏楽部においてはコンクールの過熱化、勝利至上主義などが憂慮されているが、運動部にみられる体罰問題が実は吹奏楽部にもみられる」とし、吹奏楽部にも運動部活動と同様の部活動過熱が起きていることを指摘している（p.7）。文化部活動も運動部活動が問題視している部活動の過熱と同様の状況にあると考えられる。

文化部活動の中でも吹奏楽部に関しては、ほぼすべての団体が8月から10月まで行われるコンクールの地区大会に出場し、その結果に基づいて、各地方支部から選抜された30校のみが出場することができる全国大会を目指す。朝日新聞DIGITALによると、2015年度にはすべての部門を合わせて10,671団体がコンクールに出場し、中学校の部は6727団体が出場した。文化庁によると、文化部活動に所属している中学生の目的の中で「大会・コンクールで良い成績を修める」こと（21.9%）は「友達と楽しく活動する」こと（26.4%）に次いで2番目に高い目的であるとしている（p.18）。このように、多くの吹奏楽部が部活動の目的とし出場する全日本吹奏楽コンクールは、中学校吹奏楽部の活動を把握する上で重要な要素の1つであるといえる。関向（2017）は、吹奏楽部について「コンクールありきの」活動であると述べている（p.45）。この吹奏楽コンクールについて田村（2018）は、コンクールを運動部活動における試合や大会に相当するものとして取り上げている（p.39）。関（2017）も、コンクールでの賞を目的とした吹奏楽部は文化部活動という文脈に意味づけることができないと主張し、運動部の勝利至上主義と同じ体系であるとして、吹奏楽部が運動部活動でなく文化部活動であることを疑問視している（p.13）。本研究では、このコンクールを運動部活動の試合に相当すると考える。文化庁による、文化部活動の在り方に関する総合的なガイドライン作成検討会議の第3回会議の中でも、コンクールでは競争原理が働くために、練習を抑制しにくい部分があることが指摘されている（p.11）。しかし、多くの運動部活動では試合の勝利条件が明確であるのに対し、吹奏楽部のコンクールでは何をもって勝利するかについて必ずしも明確になっているとはいえない。

こうした問題意識から、音楽の専門家によるコンクールの評価を観察することができる数少ない媒体である音楽誌『Band Journal』における評価者の講評等を研究対象とする。『Band Journal』において毎年特集が組まれている全日本吹奏楽コンクールの講評等を分析することにより、コンク

ールの審査における評価基準にどういった視点が内在しているかを検討する。本研究が、吹奏楽部は何を目指して部活動の過熱を引き起こしているかを理解する一助となることを目指す。

1. 先行研究の整理

以下では、吹奏楽部に関する先行研究の整理と、実際の聴取者が吹奏楽コンクールをどのように聴取しているかについてまとめる。これまで吹奏楽部を対象とした研究としては、以下の通りである。吹奏楽部の指導者による指導の改善を目的した佐川・羽津（2009）による研究や、吹奏楽部の音楽教育としてのあり方を論じた定岡（2014）、吉富・谷原（1998）による研究、部員確保に関する矢島（2014）、吉田（2015）、竹内（2018）の研究などが挙げられる。

また、吹奏楽部を対象とした研究の中で、コンクールについての検討は度々行われている。森田（2005）は、日本の吹奏楽コンクールの特異性とコンクールの過熱について指摘しており、コンクールの勝敗を意識した練習についても言及している。また、田口（2012）は、吹奏楽コンクールが行われている会場に着目している。田口によると、全日本吹奏楽コンクール全国大会の会場として使用されていた普門館は、演奏する会場という役割を越えて、これまでの部員たちの全国大会への道のりや努力、感動、金賞への情熱などを含む「物語」として吹奏楽関係者に捉えられていると指摘している。森田、田口の研究からはいずれも吹奏楽部の活動にとってコンクールが非常に重要な存在であることが読み取れる。

両者の研究では、吹奏楽部におけるコンクールの特異性や重要性については指摘されているが、コンクール自体に関する言及はほとんどされていない。つまり、先行研究に共通して書かれていたコンクールの賞や勝ち負けを左右する上で重要であるコンクール審査に関しては明らかになっていないのである。吹奏楽部の活動の中でも吹奏楽コンクールは大きな割合を占めるのに対し、コンクールの内実や部活動への影響はほとんど明らかになっていないといえる。

ただし、コンクールの聴取の仕方については以下の研究が存在する。現代の吹奏楽コンクールにおいて、阿部（2001）は、観客の聴取の仕方が技術や表現における音楽の聴き方に加え、吹奏楽コンクール独特の聴取を行っていることを指摘している。すなわち、「『吹奏楽』はクラシック音楽の一ジャンルではなく、まったく別のジャンルとして存在」しており、「学校における『ドラマ』『青春もの』というイメージをともなって消費されているジャンル」である（p.18）。観客の中に吹奏楽の演奏を技術や表現だけで聴くファンは極めて少なく、吹奏楽特有の「学校的なにおい」を期待して聴いているとしている。

このような阿部の指摘からみえる観客という聴取者は、審査員のような技術や表現による音楽の評価を行うのではなく、吹奏楽特有の「学校的なにおい」を含め演奏を聴取していることがわかる。阿部の研究からは、審査員とは異なる聴取者である観客によるコンクールの音楽の聴取の仕方が明らかになっている。

しかしながら、阿部の研究では観客の聴取については指摘されているが、審査員の聴取や評価の仕方については言及されていない。音楽を技術や表現という観点から聴く審査員が演奏を評価する上では、阿部の指摘するような、観客のような聴取者の視点は考慮されることはない。だが実際に阿部の指摘する「学校的なにおい」は、観客だけが期待して聴取しているのではなく、コンクールの審査員も同様のイメージや期待を持ち、評価対象としていることはないだろうか。本研究では、『Band Journal』の講評等を対象に、コンクール評価に内在する審査員の視点について検討する。

2. 分析対象と方法

以下では、コンクールの全国大会を取り上げている『Band Journal』にみられた、演奏の技術や表現以外の視点とその分類をまとめる。

(1) コンクールの審査規定

分析を行う前提として、本研究で取り上げるコンクールの全国大会には、評価方法や審査員についての公式の規定が存在することを述べておきたい。コンクール実施規定によると、審査員は全日本吹奏楽連盟の理事会によって毎年選出され、理事長に委託される。審査員は9名であり、専門楽器の異なる職業音楽家で構成されている。審査員はコンクールで演奏された課題曲と自由曲を評価し、それらを総合してA, B, Cの3段階で評価を行う。その後、A, B, Cの評価を得点化し、上位から順に金賞、銀賞、銅賞のいずれかの賞を与える。全日本吹奏楽連盟の審査規定には技術や表現とは明記されていないが、全日本吹奏楽連盟に所属しその規定に則り支部大会を実施する各都道府県の中で、北海道、福島県、山口県、徳島県、高知県の吹奏楽連盟の審査内規には演奏を専門的な視点で客観的に評価することが明記されている。その中でも福島県吹奏楽連盟以外の審査内規には技術や表現という2項目それぞれの観点から評価することが明記されている。福島県吹奏楽連盟の審査内規でも芸術性や技術性によって評価することが明記されており、いずれも音楽を専門的な観点から評価することがわかる。

なお、これらの評価方法は2013年度からのものであり、2012年度まではAからEの5段階評価であったが評価基準には変更はない。A, B, C審査の方法については、事前に審査員説明会が開かれ、審査員は規定を厳守しなければならない。この審査員説明会の内容や、詳細な審査基準については一般には公開されていないが、現在公開されているコンクールの審査内規では、技術や表現以外の評価があることは記載されておらず、中学校の部、高等学校の部、大学・一般の部によって評価基準が異なるといった内容もない。また、コンクールでの教育的な配慮についても審査内規に記述はない。すなわち、コンクールにおける審査では、音楽の技術や表現のみによって評価することが原則であるといえる。

しかし、実際の評価に本当に技術や表現以外の視点が介入していないのかについては、A, B, Cの評価を見る限りでは明らかには出来ない。あるいは阿部が「学校的なにおい」と指摘したような内容が評価に介入している可能性もある。そこで本研究では、コンクールの全国大会に出場した各団体への講評のコメントが公式に記載されている『Band Journal』を研究対象とする。

(2) なぜ『Band Journal』か

本研究で分析する音楽雑誌『Band Journal』は、吹奏楽の専門誌であり、コンクールについて毎年公式に取り上げている音楽雑誌である。本研究ではその中でも、『Band Journal』内のコンクールに関する特集に注目し、①全国大会に出場した中学校の部全体の総評、②各団体に対する個別の講評、③全国大会に出場した中学校の部について書かれた記事に焦点をあてる。また、大学・一般の部の講評や記事の中にも中学校の部について書かれている箇所があれば抜き出している。コンクールの全国大会では、詳しい評価内容は公開されていないが、『Band Journal』においてはプロのオーケストラ奏者など職業音楽家による詳細な講評が文章で書かれている。コンクールの規定により、その年に全国大会の審査員を務めた者の評価のコメントは記載されていないが、『Band Journal』内での講評者のほとんどは、過去に実際に全国大会で審査員を務めた者や、その年の支部大会で審査員を務めた者であるため、審査員と同等の専門的な観点から演奏を評価できる存在としてみなすことができる。また、戸ノ下(2008)は、『Band Journal』を吹奏楽の老舗の雑誌と表現している(p.9)。こういった点からも、『Band Journal』を対象とすることは妥当であると言える。『Band Journal』内の評価者の評価がその年の実際の審査員の評価と全く同様であるとはいえないが、講評を書く評価者が審査員と同様の存在であるということから、専門的な視点で技術と表現で評価する点では評価に大きな差は生じないと考えられる。

コンクールの評価内容が規定により公開されていないため、吹奏楽部顧問や部員たちは手に入れる範囲の中で最も信頼性と妥当性が高いと考えられる『Band Journal』の評価を公式のコンクール評価の代替として自身の部活動の練習やコンクール本番の演奏に反映させる。すなわち、『Band Journal』の内容が、吹奏楽部の活動を過熱させる要因となるほどの影響力を持ち得ると可能性がある。この『Band Journal』の講評に学校的なにおいて、演奏の技術や表現以外の視点が介入していれば、顧問や部員はコンクールの評価にもそのような視点が介入していると捉え日々の練習や本番の演奏に反映させ、それが部活動の過熱を促す要因となり得る可能性がある。

大倉（2017）はこの『Band Journal』に関して、「一種の教育的側面はそれほど前面に出ることはない。ほぼ一貫して、演奏者、指導者に有用な知識付与や技術向上のための記事が中心となっている。」(p.40)と述べており、『Band Journal』内では教育的な側面が描かれないとしている。

ただし、大倉の研究では『Band Journal』内の教育的側面が前面でない具体的な根拠は示されていない。本研究では、阿部の指摘した学校的なにおいて、演奏の技術や表現以外の別の視点が『Band Journal』内のコンクールの特集に存在しているかどうかについて分析を行う。

また、本研究の対象は中学生とする。その理由としては、①中学生の部活動加入率は90%を超えており高校生を対象にするより包括的であるため、そして先述した文化庁による中学生の文化部活動への目的もあるように、②中学生の方がコンクールの重要性が高いと考えられており、コンクールの位置付けがより明確になると見えるためである。以上をコンクールを取り上げる本研究の対象として設定した。

(3) 分析方法

本研究では、先述した『Band Journal』内の全日本吹奏楽コンクールについて取り上げられている箇所から技術や表現以外の観点について書かれた文をすべて抜き出している。抜き出した文がどのように評価しているといえるのかを分析結果の中で分類しまとめていく。

3. 分析結果

(1) 『Band Journal』におけるコンクールの評価基準

本研究では、『Band Journal』に掲載されている第48回から第65回の2000年以降の近年のコンクールの全国大会を取り上げる。先に挙げた4つの箇所から、演奏の技術や表現以外に関する言及されている文章をすべて抽出し、さらにその中で、教育的な配慮や学校的なにおいてに関する視点が介入していると考えられる言葉や文章を抽出した。それらの文章や言葉から、『Band Journal』で講評を行う審査員のコンクールに対する捉え方と評価方法が3つに分かれていると考え、以下のように分類した。

① 技術や表現のみ評価するタイプ

1つ目に、演奏を技術や表現のみによって評価しているタイプである。プロの演奏に対する評価と同じ視点から評価を行なっているのがこのタイプである。例えば、2012年第60回大会の記事には、審査方法について以下のように評価すると書かれている。

現在のコンクールでは、連盟から依頼された各楽器と指揮者か、選ばれた審査員が、各自のプロフェッショナルな観点と幅広い音楽性により、各団体の演奏を比較審査し、その点数に応じて連盟が賞の区分けを決定する、という形で成り立っています。審査員と連盟、双方で客觀性を大事にしている審査方法です。(p.38)

このプロフェッショナルな観点と幅広い音楽性がコンクール評価の技術や表現にあたる部分であると考えられる。そして、客觀性を大事にしている審査方法だとあるように、このタイプは、コンクールの規定にある、技術や表現で演奏を評価することに忠実であるといえる。また、2016年第64回大会の全体の講評でも、技術や表現の観点から評価されていることが読み取れる。

休みのパートがやたらと笑顔で、身体を左右に動かし、何かを口ずさんで（歌って？）いる。これはとくに課題曲のマーチに特化して見られることです。まずどんな笑顔でも、それで点数がよくなることはありません！（p.45）

とあり、プロのコンクールで行われないことや、プロから見て不自然なことが指摘されている点では、この評価者も技術や表現で評価しているタイプであるといえる。さらにこの評価者は「もしプロの奏者が試用期間にそんなことをしていたら、絶対に本採用されないでしょう。さらに何か口を動かしていたりしていたら……たまりません。」（p.45）と続け、中学生のコンクールにおいてもプロと同じ観点から演奏を評価していることがわかる。このタイプが規定にあるような、コンクールが審査員に求めるような評価を行なっているといえるが、実際にこのタイプに該当する評価者は、『Band Journal』の中ではみられなかった。

② 教育に関する視点を明言して評価するタイプ

2つ目に、教育活動や学びの観点を介入させていることを明言して評価しているタイプである。このタイプの特徴は、コンクールを教育や学びに繋がる場として捉えており、コンクール出場が中学生にとってどのように影響を与え成長させたかを考慮に入れている。2008年第56回大会の個別の講評では以下のように書かれている。

指導者的情熱が部員たちの心を開花させ、こうしたいという気持ちを引き出します。演奏が終わった後の充実感を味わうためにも、平常心で取り組みたいです。そのためには、楽器だけの練習以外にも、ボランティア活動や体験学習など、いろいろな経験が中学生を成長へと導きます。（p.66）

この評価者は、コンクール後の演奏の充実感にコンクール以外の教育活動が影響すると述べており、コンクールに教育や学校的なにおいてする視点を介入させていることがわかる。また、2010年第58回大会の全体の記事の中には、コンクールの審査方法自体を指摘する内容がある。

吹奏楽にどっぷり浸かっていない作曲家、指揮者、音楽評論家、そして教育者も審査員に加えた方が、多面的で適切な審査になるように思います。また全国大会は無記名でA～Eに○をつけるだけです。審査を受けるのは子どもたちです。是非、講評を一言でも二言でも記入していただき、心の通った審査用紙にしていただきたいと願います。（p.58）

現在は技術や表現で評価することを前提として審査員を職業音楽家で構成されているが、この記事の中では音楽の技術や表現を評価する技能を持ち合わせていないであろう教育者を審査員に加えることが提案されている。これは、コンクールの演奏を技術や表現によって評価するという前提自体をなくし、子どもたちの教育的な配慮のために審査を変更すべきであると明確に示されている。

このように、実際のコンクールの評価の代替として顧問や部員が捉えていると考えられる『Band Journal』の中でこのような教育に関する視点が明示されていることは、実際にコンクール自体でこのような視点が介入していなくても、顧問や部員が練習や本番の演奏に反映させる可能性があるといえる。

③ 教育に関する視点を明示せずに評価するタイプ

3つ目に、教育に関する視点について明言はしていないものの、教育に関する視点を考慮に入れて評価していると考えられるタイプである。このタイプは、2つ目に挙げたような、教育や学校に関する直接的な言葉を文章の中に書くことはしていないが、文章の中で教育に関係するような言葉を用いたり、評価観点に入れたりしている。このタイプはさらにいくつかの型に分かれており、次節で詳しく述べる。

(2) 教育に関する視点が介入している評価の分類

以下では、(3)で取り上げた3つ目のタイプである、教育に関する視点について明言はしていないものの、教育に関する視点を考慮に入れて評価していると考えられるタイプがどのような観点から評価しているのかを分類する。本研究では大きく分けて以下の4つの型に分類した。

表 審査における教育に関する視点の分類

①	中学生「らしさ」	
②	発達段階	努力・挑戦する態度
		演奏技術
		選曲
③	練習の過程や部活動の背景	
④	演奏以外のパフォーマンス	

① 中学生「らしさ」

第1に、演奏者の「中学生らしさ」を評価観点に入れる型がある。この型は、審査員が個々に考える中学生像を、演奏と関連させて評価している文章を指す。

2003年第52回大会の個別の講評には、「中学生らしいはつらつとした演奏で、前向きであり、今後、ますます飛躍する力のあるバンドだと思います。」(p.66)とある。ここでは評価者が中学生像として考えるはつらつとした印象が演奏から感じられることを評価している。2015年第63回大会の個別の講評にも、「明るく元気一杯の中学生らしいサウンドがホールに響きわたりました。」(p.34)とあり、評価者の考える中学生らしいサウンドが響いたことを評価している。このように、個々の評価者の中の中学生像を演奏と関連させ、そこから中学生らしさを見出し、プラスに評価している。このような文章からは、演奏自体の技術や表現とは異なる、演奏から感じられる中学生らしさや中学生の印象が評価を左右し得ると読み取ることが出来る。

② 発達段階

第2に、中学生という発達段階を評価観点に入れる型がある。この型はさらに3つの型に分類できる。1つ目に、未発達な中学生が挑戦したり頑張ったりしたことを評価する型である。2016年第65回大会の個別の講評の中では以下のように書かれている。

とはいえる、敬遠されがちだった課題曲IIIを、しっかり楽譜を読み込み、練習を積み重ねれば中学生でも充分演奏が可能だと見事に証明していたと思います。コンクールに向け数か月から半年かけて取り組み、バンド自身の成長にも繋がったのではないでしょうか。その挑戦する姿勢も高く評価したいと思います。(p.37)

ここでは中学生が敬遠するような難解な課題曲に挑戦する姿勢が高く評価されている。演奏自体ではなく、高校生や大学生、一般の出場者よりも発達段階の未熟な中学生が演奏に取り組んでいるという、中学生の挑戦する姿勢が評価に影響していると考えられる。また、2004年第52回大会の中学校の部全体の講評では以下のように書かれている。

楽器を持ってまだ間もない中学生が自分の限界にチャレンジし、みんなで力を合わせ暑い夏を乗り切ってきた、その自信がすべての団体に感じられ、一聴衆として、元気をもらったような気持ちになり、終演後もすがすがしい気分でした。高校生の演奏に比べると稚拙さも完成度の低さもありますが、この発達段階である中学生たちに心から拍手を送り、「中学生もがんばっている」、そうみなさん伝えたい、そんな気持ちにさせられました。(p.66)

ここでは、演奏自体は高校生に比べて完成度が低いと指摘しつつも、中学生が自分の限界にチャレンジしたこと、「中学生もがんばっている」ことが評価されている。高校生や大学生、一般の出場者に比べ、中学生という発達段階が評価に考慮されていると考えられる。文章の中に「楽器を持ってまだ間もない中学生」とあるため、中学生という発達段階ではなく楽器の初心者であることが考慮されているという見方もできるが、楽器をはじめるタイミングは必ずしも中学生段階だけではなく、高校生や大学生、大学卒業後に楽器を持ち始める演奏者も多い。しかし、高校、大学、一般の部の記事や講評の中ではこのような内容は書かれていない。挑戦したり頑張ったりすることを評価する記述についても、中学校の部の講評特有であり、プロではないアマチュアの段階であるという条件の下ではどの部門も同様であるのに、中学生のみ発達段階が講評の中で強調されている点は注目すべき点であるといえる。

2つ目に、中学生の演奏の限界が審査員個人の中に基準として設けられている型である。たとえば、2011年第59回大会の個別の講評の中に「中学生でもこんな金管の響きが作れることに感心する。」(p.53)とある。「中学生でも」という言葉からは、本来審査員が想定していた中学生の演奏の基準よりも高かったことが読み取れる。2014年第62回大会の個別の講評の中でも「中学生とは思えない美しい音色で、リヒャルトの音楽が表現されました。」(p.37)と書かれている。「中学生とは思えない」とあるように、ここでも審査員の考える中学生の水準を越えた演奏であることが評価されている。これらのような、中学生の発達段階には演奏技術が高いという評価からは、審査員が中学生という未熟な発達段階を考慮し、中学生に可能な演奏の限界を設定した上で評価を行なっていると考えができる。高校、大学、一般の部の講評にはこのような表現は見られないため、中学生特有の発達段階を考慮した演奏技術の限界が、審査員の中に一種の基準として存在していると考えられる。

3つ目に、中学生に配慮して評価している型である。2009年第57回大会の個別の講評で「ただ残念ながら、中学生でそのような音を表現するのは、技術的にも、精神的にも、無理な場合があります。」(p.47)とあり、中学生の発達段階における技術面と精神面への配慮が行われている。また2011年第59回大会のコンクール全体の講評においても以下のように書かれている。

このように考えると、技術的な問題だけでなく、表現されるべき内容に関しても、中学生が

取り組むにふさわしい作品とそうでない作品があることがお分かりいただけるのではないで
しょうか。最初に述べたように、ほとんどのバンドが1年生もメンバーに加えているはずです。
それなのに中学生にとって表現すべき内容が難しすぎる曲、また逆に中学生に学ばせるには内
容が薄すぎる曲が多く演奏されていることに、個人的には大きな問題を感じました。（p.60）

評価者たちは、中学生には表現できないような難解な曲がコンクールで演奏されていることを問
題視しているが、このような文章からは、評価者が中学生という発達段階を配慮して考えているこ
とが読み取れる。1つ目の型では、未発達な中学生が挑戦したり頑張ったりしたことという点が評
価されており、2つ目の型では、中学生の発達段階を考慮した演奏技術の限界を基準として設定し
評価されており、3つ目の型では、未発達な中学生にとって難解な技術や表現が含まれている選曲
についての配慮を含めて評価されている。これらに共通する点は、中学生という発達段階が評価に
強く反映されている点である。高校、大学、一般の部でこのような発達段階に関する講評がないこと
から、中学生の発達段階に留意する必要があるという教育に関する視点が存在していると考えら
れる。

③ 練習の過程や部活動の背景

第3に、演奏の苦労や努力、先生と生徒の信頼関係など演奏から想像されるコンクールまでの過
程や背景を評価する型がある。2017年第65回大会の個別の講評には、この型を明確に具体化した
内容が書かれている。「しかし忘れてならないのは、その陰にある努力。ここまで道のりは決して
平坦ではなかったはずです。みなさんに心からのプラボー！そして大きな拍手を送りたいと思いま
す。」（p.42）ここでは演奏自体とは別に、その陰にある努力や道のりを高く評価されている。演奏
の技術や表現そのものではなく技術や表現の陰にある中学生の努力や頑張りの過程が評価されてい
る。さらに、2015年第63回大会の個別の講評では、「半年でここまで育て上げる手腕にも脱帽です。
そして何より先生を信じて頑張った生徒たちの努力に拍手！」（p.36）とあり、演奏とは別に、演奏
から想像される中学生の努力や先生を信じて頑張ってきたであろうこれまでの過程が評価されてい
る。また、2009年第57回大会の個別の講評では、以下のように評価されている。

中学生の等身大の音楽で、無理な背伸びやごまかしがなく、非常に丁寧で好感度の高い演奏
です。この丁寧な表現は、日常の丁寧な練習から生まれるに違いありません。先生と部員の信
頼関係も強固なようで、先生の指示にメンバーがよく応えています。（p.44）

ここでは、演奏者が指揮者の支持に応える姿から先生と部員の強固な信頼関係が想像され、評価
されている。実際に信頼関係が強いかどうかはこの評価者は認知していないだろう。しかし、評価
者が演奏から信頼関係の強さを感じ、それに対して評価を行うことからは、評価者の中に信頼関係
の基準があり、演奏からその強さをはかり評価を行っていることが考えられる。指揮に忠実である
ことは、演奏者の技術が高いという観点からも評価が可能だと考えられるが、ここでえて指揮者
である教師と部員の信頼関係の強さを取り出したことに、教師と部員の関係性という教育に関する
視点が読み取れる。

さらに、努力や苦労は、生徒からだけでなく、教師からも見出されている。2004年第52回大会
の中学校の部全体の講評では教師のこれまでの苦労について触れられている。

顧問をされる先生方は転勤もめまぐるしい中、この全国大会に出場されるまでには数え切れ
ないほどのご苦労があったと思います。さらには週休2日制、総合学習の時間の導入、授業時

間確保、2学期制への移行などによって活動時間が制約される中、すばらしい演奏を披露してくれたすべての出場団体に、改めて敬意を表したいと思います。(p.64)

ここでは学校教育と関連させて顧問の苦労について触れられている。評価に直接関係しているかはこの文章では断定できないが、評価者は指揮者を、演奏を指揮する者としての存在に加え学校教育を行い、演奏者を生徒と捉え教育する、教師としての存在とみなし考慮して演奏を聴いていることがわかる。

④ 演奏以外の動き

そして第4に、演奏以外での演奏者の動きを評価している型が挙げられる。これは、演奏中や演奏以外の演奏者たちの動きや表情が評価観点に入れられた文章を指す。たとえば、2014年第62回大会の個別の講評では、「演奏終了後の生徒から先生への『ありがとう』も感動です!」(p.41)とあり、演奏以外の点が感動した点として評価されている。演奏の技術や表現ではなく、評価される場面ではないところが評価の対象となっている。コンクールだけでなく、すべての音楽コンクールでは、本来このように、舞台上で演奏に関係のない動きをすることはなく、コンクールの規定には書かれていらないものの、審査員によってはマナー違反だと考える者も存在する。今回の評価者は生徒たちの感謝の気持ちとそれを舞台上で表したことに対し「感動です!」と高く評価しているが、このような動きに対しては、否定的な意見も『Band Journal』内に存在している。音楽の演奏とは直接関係のない動きについて述べた講評の中でも、2016年第64回大会の個別の講評では、プロの演奏では見られない演奏者の動きに評価者が違和感を抱いていることが読み取れる。「とくに課題曲においてですが、ずっと休んでいる人が身体を動かしすぎているような気がしました。」(p.35)とある。この評価者はプロの演奏ではこのような動きは行われず、むしろ違和感として印象に残ることを指摘しているといえる。コンクールが他の音楽コンクールの規定と同様の規定に則って評価されるのであれば、演奏に関係のない、プロの世界では行われないような動きを評価する必要はない。しかし、2014年第62回大会の評価のように、演奏以外の動きを評価する視点からは、技術や表現によって評価される演奏とは別の、学校的なにおいが感じられる観点を評価に加えていると考えられるのである。

(3) 考察

以上より、分析によって、コンクール評価の代替となる『Band Journal』の評価には、技術や表現とは異なった、教育に関する視点や学校的なにおいの介入した視点が存在しており、その視点が介入した評価は4つに分類できることを示した。審査の代替と考えられる『Band Journal』内に教育的視点が介入していることにより、吹奏楽部の顧問や部員が音楽の技術や表現以外の練習や演奏を取り入れる可能性があるといえる。

また、この結果は以下の研究を援用することができる。運動部活動研究において、久保(1998)によると、運動部活動は「競技的空间」と「教育的空间」の二重性の上に成立している。競技的空间における目標は、「勝利」であるのに対し、教育的空間では学校の意図が介入する。この二重性は、運動部活動顧問に葛藤をもたらすとしている。つまり、「『教育的／競技的二重空間』において、『コーチ』は『コーチであると同時に教師』であり、また『教師』は『教師であると同時にコーチ』であることが求められているのである」(p.268)。

本研究による分析結果から、吹奏楽コンクール評価に内在すると考えられる教育に関する視点や学校的なにおいは、久保の指摘した教育的空間の中にある視点と同様であると考えられる。本研究では、これらの教育に関する視点や学校的なにおいを合わせて教育的視点と言い換える。

また、久保が指摘した顧問の二重性は吹奏楽部においても当てはめることができる。先述したように、運動部活動での試合は吹奏楽部のコンクールに相当すると考えられ、吹奏楽部の顧問は、音楽の技術や表現を指導するコーチの役割と、学校の意図を踏まえた教師の役割を持っている。

さらに、吹奏楽部においてこの二重性は、顧問だけでなくコンクールの審査自体に内在している可能性があるといえる。つまり、技術や表現によってのみ評価されるコンクールの審査に教育的な視点が介入している可能性があると考えられる。本来教育的視点が介入される場ではないコンクールの審査の中に教育的視点が介入していることによって、吹奏楽部の活動に影響を与える可能性があるといえる。吹奏楽コンクールの評価の代替として捉えられる『Band Journal』に教育的視点が介入していることで、『Band Journal』を公式の評価と捉えた吹奏楽部顧問や部員が、日々の練習や本番の演奏に反映させる可能性がある。その結果、教育的視点に配慮した、本来行う必要のない練習や演奏を行うことにつながる可能性が考えられる。つまり、吹奏楽部の部活動過熱は、技術や表現という演奏自体ではなく、それとは全く異なる教育的視点から起きているとも考えられるのである。

おわりに

本研究では、『Band Journal』これまで十分に明らかにされていなかったコンクールの審査における評価基準に、教育的視点が含まれている可能性を明らかにした。この結果は以下の二点を示唆する。

第一に、阿部の研究では吹奏楽コンクールでは観客が演奏者に「学校らしさ」を求めていることが指摘されていたが、本研究では、観客のみならず審査員と同等の立場であるといえる評価者も「学校らしさ」を求めており、言い換えれば評価基準としていることである。音楽の専門家であっても、全日本吹奏楽コンクールにおいて、技術や表現のみならず「教育的であるかどうか」を評価している可能性が考えられる。

第二に、コンクールの結果に教育的視点が介入する吹奏楽部の独自性である。久保は、運動部活動が、本来「教育的空間」であったにもかかわらず、「競技的空間」でもあることにより、二重性を持っていることを指摘した。久保によれば、その「競技的空間」が優先されること、つまり試合に勝つことが目標となることにより、部活動が勝利至上主義に向かって過熱するとされる。本研究では、コンクールで「勝利」するためには教育的でなければならないという、運動部活動でいえば試合の勝利条件自体に競技的要素と教育的要素が含まれるという独自の構造をなしていると言える。久保の言葉を援用すれば、吹奏楽部ではコンクールの審査自体に二重性が存在する。このことを踏まえれば、吹奏楽部の部活動の過熱とは、演奏の技術や表現の向上を目指した過熱であるだけでなく、より教育的であることを目指して過熱する可能性があるのである。

最後に今後の課題について述べる。本研究では『Band Journal』から教育的視点がみられたが、それ自体が評価であるわけではない。そのため、審査員経験者や団体に対する調査が必要である。さらに、実際に活動する顧問や部員が、コンクールの審査をどう捉えているのかも問わなければならない。コンクールを目指す吹奏楽部の顧問や部員が、評価基準を何によって判断し、どのように部活動に取り入れているかを、インタビュー調査等を通して明らかにする必要があるといえる。

〔文献〕

- 阿部勘一, 2001, 『プラスバンドの社会史—軍隊から歌伴へ—』, 青弓社.
- 朝日新聞 DIGITAL, 2019, 「全日本吹奏楽コンクール, この大会について」, (2019 年 1 月 25 日取得, <http://www.asahi.com/edu/suisogaku/brass/about.html>).
- 文化庁, 2018, 「文化部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」, (2019 年 1 月 25 日取得, http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashikingikai/kondankaito/bunkakatsudo_guideline/03/pdf/r1410885_01.pdf).
- 文化庁, 2018, 「文化部活動の在り方に関する総合的なガイドライン作成検討会議第 3 回議事録」, (2019 年 1 月 25 日取得, http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashikingikai/kondankaito/bunkakatsudo_guideline/03/pdf/r1410885_01.pdf).
- 文化庁, 2018, 「文化部活動の実態把握に関する調査」, (2019 年 1 月 25 日取得, http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashikingikai/kondankaito/bunkakatsudo_guideline/02/pdf/r1409500_02.pdf).
- 福島県吹奏楽連盟, 2019, 「福島県吹奏楽コンクール」, (2019 年 1 月 25 日取得, <http://fukushimaisuiren.jp/app/wp-content/uploads/2016/04/contest-jissikitoi-2504.pdf>).
- 北海道吹奏楽連盟, 2019, 「北海道吹奏楽コンクール審査内規」, (2019 年 1 月 25 日取得, http://www.ajba.or.jp/hokkaido/_src/1903/2017-03_konsinsanaiki.pdf).
- 一般社団法人全日本吹奏楽連盟, 2019, 「連盟規定」, (2019 年 1 月 25 日取得, <http://www.ajba.or.jp/kitei.htm>).
- 高知県吹奏楽連盟, 2019, 「高知県吹奏楽コンクール審査内規」, (2019 年 1 月 25 日取得, http://www.ajba.or.jp/kochi/KITEI/規程集/7 県吹コン審査内規 H30_4_29.pdf).
- 久保正秋, 1998, 『コーチング論序説—運動部活動における「指導」概念の研究—』, 不昧堂出版.
- 森田信一, 2005, 「クラブ活動としての吹奏楽の変遷—女性進出の視点から—」, 『富山大学教育学部紀要』, 第 60 号, pp.131-140.
- 大倉恭輔, 2017, 「日本の吹奏楽におけるポピュラー音楽の導入—Band Journal 誌の内容分析から」, 『実践女子大学短期大学部紀要』, 第 38 号, pp.37-49.
- 音楽の友社, 2000-2017, 『Band Journal』.
- 定岡利典, 2014, 「スクールバンドのメソードに関する一考察」, 『総合教育センター紀要』, 第 34 号, pp.23-47.
- 佐川馨・羽澤知子, 2009, 「中学校吹奏楽部員の部活動『満足感』『有用感』に影響する要因一部活動に所属する中学生への質問紙調査への結果から—」, 『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』第 31 号, pp.29-39.
- 関向央奈, 2017, 「学校教育における吹奏楽部の在り方—コンクールに対する意識を中心に—」『北海道研究大学創路校研究紀要』, 第 49 号, pp.37-46.
- 関朋昭, 2017, 「なぜ吹奏楽部は文化部なのか—運動部と文化部のダイコトミーに着目して—」, 『名寄市立大学紀要』, 第 11 号, pp.7-16.
- 田口裕介, 2012, 「吹奏楽の甲子園—『普門館』をめぐる物語としての音楽—」, 『早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊』, 第 19 号, pp.279-289.
- 田村基成, 2018, 「文化部活動の特徴」, 『部活動改革 2.0—文化部活動のあり方を問う—』, 中村堂.
- 徳島県吹奏楽連盟, 2019, 「全日本吹奏楽コンクール徳島県大会（全国大会へ通じる部門）審査内規」, (2019 年 1 月 25 日取得, http://www.ajba.or.jp/tokushima/PDF/suikon_a_s.pdf).
- 戸ノ下達也, 2008, 『日本の吹奏楽史—1869-2000—』, 青弓社.

山口県吹奏楽連盟, 2019, 「全日本吹奏楽コンクール山口県大会審査内規」, (2019年1月25日取得, http://www.ajba.or.jp/yamaguchi/kitei-kiyakusyu/2018_kitei/05%20suikon_shinsanaiki.doc).
吉富功修・谷原葉子, 1998, 「スクールバンドの指導者に関する研究(2) —学校吹奏楽活動の教育的効果を中心として—」, 『広島大学教育学部教科教育学科音楽教育学教室論集』, 第10号, pp. 11-34.

**Possibility of Intervention of Educational Viewpoint in Music at the All Japan Wind Instruments Competition in Junior High School's Part:
Review of the Music Magazine "Band Journal"**

ISHINO Miku

In this research, I picked up the brass band club of junior high school and presented the possibility that an educational viewpoint intervened in the review of the All Japan Wind Instruments Competition by reviewing the music magazine "Band Journal". Among the reviews of "Band Journal", there are several educational viewpoint and they are classified as follows:

- 1, Closeness to natural style of junior high school student
- 2, Development stage (It is further divided into "effort, attitude to challenge", "performance technique", "music selection")
- 3, Background of practicing process and club activity
- 4, Physical performance other than musical performance

Originally, each performance is evaluated only by technological skill and expression skill.

However, it turned out that the educational point of view mentioned above exists in "Band Journal" as a substitute for the competition evaluation. Advisers and members of the brass band club who think "Band Journal" has the evaluation of official competition may reflect the educational perspective in daily exercises and performances. In addition, because the educational viewpoint intervenes in the brass band competition though "B J," the brass band competition has two characteristics that is not only a competitive aspect but also an educational aspect. By this research, it was suggested that the brass band contest of the junior high school has another aspect.

